

**事後評価報告書**  
**(日本-メキシコ研究交流)**

1. 研究課題名: 「内向き整流性 K<sup>+</sup>チャネルへのバイオメディシン」

2. 研究代表者名:

日本側: 倉敷芸術科学大学 生命科学部 生命医科学科 教授 岡田 誠剛

相手側: National Autonomous University of Mexico, Institute of Bio-technology, Professor,  
POSSANI POSTAY, Lourival D

3. 総合評価: C

4. 事後評価結果

**(1)研究成果の評価について**

クモ毒の中からポア形成能のあるペプチドを見出し、その生理活性を解析して発痛作用やがん細胞特異的な細胞毒性を見出した点は高く評価できる。また植物の低分子化合物に電流を増大させる活性があることを見出して、抗うつ作用に関しての解析に発展させた点は、重要な成果であると言える。

しかしながら、クモ毒素ペプチドを利用して日本側が薬理作用の解明、有用性を示すことを主目的とする中で、当初想定した活性ペプチドやその情報が得られなかったのは残念である。また本来の計画にない植物成分を用いた化合物スクリーニングを行っているが、この点にメキシコ側の関与が示されておらず、交流事業として実質的な活動があったとは判断できなかった。

**(2)交流活動の評価について**

メキシコ人を日本側での研究員として雇用し、その後も日本国内で研究機関に所属している。また、実際に本課題終了後も共同研究を継続しており、今後の共同研究の発展も期待できる。またメキシコ訪問時のセミナー開催により、日本側の研究を通してメキシコの若手研究者との交流を図ったことは良い試みだったと考える。

一方、相手側の研究貢献度が低いと言わざるを得ず、交流事業として相手国が得たメリットが明確でない。計画していた国際シンポジウムが開催されなかったことに関しては、相手国の代表研究者の年齢などを理由にしているが、不測の事態というより、準備が十分であったか、すり合わせの段階で臨機応変の対応ができなかったか等、疑問が残る。交流自体もメール会議が多く、研究内容や目的に対する深い議論がどこまでなされたか、読み取れなかった。

**(3)その他**

研究方針が二転三転したように見え、プロジェクト管理が不十分であるような印象を受けた。